

【研究報告（平成 29 年度）】

チーム② 学童期・思春期の学校適応支援・活力ある人間形成の研究チーム 「生きる力」が育つ学校文化を創る

皿田洋子^{*1)}、徳永豊¹⁾、松永邦裕¹⁾、本徳勇氣¹⁾

1) 福岡大学人文学部、*) チーム責任者

要 旨

本事業は、今日の学校における児童・生徒の適応にかかる諸問題、不登校、いじめ、暴力、自死、などの背景にある自尊心や効力感、コミュニケーション・スキルなどの不全さが指摘される中、児童・生徒の生き生きとした学校生活を保障するための試みとして児童・生徒が自らの可能性を引き出し、活かす体験学習の機会を提供し、自他共存の学校文化を創り出すことを支援することを目的としている。具体的には、人間関係に関わる動機やスキルが現実の関係性の中で萎縮しやすい児童期・思春期に焦点をあて、social skills training (SST) による人間関係のスキルの育成・向上をはかり、学校生活を充実させる活力を発揮できるように支援する取り組みとして本事業を展開させる。

1. 緒 言

人間の生涯において、児童・思春期は「個」としての自立の基盤となる自尊心や心理社会的技能、適応力等の発達が課題となるが、今日にあっては不登校、いじめ、引きこもり等に象徴されるように、現実世界における人間関係や生活ストレス等による不本意な学校生活を余儀なくされる児童・生徒が少なくない。

本事業は、児童・思春期段階にある子どもたちの現実生活の場としての学校生活におけるストレス対処や対人関係スキル、自己調整などの力（社会的技能）を臨床心理学的な方法論

(Social Skills Training) によって育て、高めることである。それによって児童・生徒は適切な自尊心・効力感を身に付け、結果的に不登校や引きこもり、いじめ等に象徴されるような学校不適応が軽減され、さらには社会や未来への積極的な展望を児童・生徒に保障できるような学校文化づくりに繋がると考える。また、この事業を通じて教師の指導・支援力を高めることに繋がる成果を得ることを目的とする。

なお、この事業は福岡大学倫理委員会の承認を得ている。

2. 方 法

1) 対象

- ・F市内A小学校4年生全5クラスの150名
- ・F市内B中学校1年生全3クラスの120名

2) 方法

SSTの実施の流れ

各教室において、一斉に実施。実施者は、訓練を受けた学生、大学院生で小学校は3人一組で45分、中学校は、2人一組で50分実施した。

練習の流れは以下の通り

- ① インストラクション
- ② スキルのモデリングの提示
- ③ ロールプレイを用いた練習
- ④ よかったところをあげる
- ⑤ さらによくなる所を皆であげる
- ⑥ もう一度ロールプレイを用いた練習
- ⑦ よかったところをあげる
- ⑧ 練習したことを実際にやってみよう
促し、宿題カードを配布

評価

社会的スキル尺度を使用。

3. 研究結果

1) 実施回数

SSTは学校側が指定する日時に、小学校は1年間で計5回（1学期1回・2学期2回・3学期2回）、中学校は1年間で計4回（1学期1回・2学期2回・3学期1回）実施した。

2) 取り組んだターゲットスキル

<小学校>

1学期：さわやかな挨拶、あたたかい言葉かけ

2学期：友達を誘う

3学期：困っている人に声をかける

<中学校>

1学期：あたたかい言葉かけ

2学期：気持ちを伝えるコミュニケーションスキル（話すスキル）

3学期：気持ちを伝えるコミュニケーションスキル（聞くスキル）

3) 評価

社会的スキル評価尺度を使用し、小学校は開始前、1学期の終わり、2学期の終わり、3学期の終わりの4回実施した。中学校は、SST開始前、1学期の終わり、2学期の終わりの3回実施した。データは現在集計中である。

4. 考察

児童・生徒について

小学校は、非常に積極的に取り組み、ターゲットスキルのモデルも集中して見ている。非常にスキルの吸収が早い。最初は班分けをしないでスキルの練習をしていたが、担任側の意見もあり、多くの生徒に練習の機会が与えられることが望ましいということで、30人の生徒を3班に分けて、それぞれに担当が入り、練習を行うようにしたところ、練習への集中力が高まった。ロールプレイへの参加も意欲的でしり込みする生徒がほとんどいなかった。やや消極的な生徒には、班の他の生徒が上手に勧めており、班の凝集性がスキル向上に反映していると考えられる。特に、10人前後のグループごとに一人の担当が入って行うというスタイルは

非常に効果的であると思われる。

中学の場合は回数が十分でなかったことと、班に分けての練習でなかったため、練習を体験できる生徒が限られていたためスキル獲得に繋がりが難かった。今後、学校と相談しながら実施方法を検討していかなければならない。

小学校、中学校とも年齢の近い学生から指導してもらったことが非常に受け入れやすかったのではないだろうか。親でもない、教師でもない、お姉さん、お兄さんのような存在がSSTの効果を押上げているように思われる。

実施担当の学生について

担当者は人文科学研究科教育・臨床心理の修士1年生を中心に、人文学部教育・臨床心理学の学部生3、4年生の総勢15名でおこなったが、実施前の打ち合わせ、練習、そして本番とかなりの時間を費やしたが、実際に児童・生徒の前に立つという経験は非常に大事な経験につながった。回を重ねるごとに緊張もほぐれ、何よりも児童・生徒に対するあたたかい関わりが自然にできるようになった。

担任について

小学校も中学校も担任が見守る中で行われたので、児童・生徒の新しい発見につながったのではないだろうか。また、担当者の学生へのアドバイスも積極的になされ、学生を育てるという意識も強く教師側、学生側両者にとってよい刺激になったと言えよう。

学年末に小学校の各担任へ個別インタビューを実施した結果は以下の通りである。

「生徒は楽しみにしている」「手があがるようになった」「道徳の時間は良い子の像を言おうとしているが、SSTでは一人一人が自分の意見を言っている」「SSTではやれているのに日常の中ではなかなか難しい」「繰り返しの練習が必要ということだ」「SSTの存在が生徒の中でだんだん大きくなってきている」「人格的にも成長したように思われる」「1年間続けてきたのがよかった」「しゃべらない子がしゃべれるようになった」

「自分の生徒への接し方を振り返ることができた」「ついつい怒ってばかりいた」「SSTでの学生さんのような接し方をすれば生徒はうれし
いはず、もっと変わることができたと思う」
「SSTは本当は担任が実施しないと、思った」

5. 結 論

1年間取り組んでみて、当初の狙いの『すべての児童・生徒に人間関係のスキルを高め、学校生活を充実させる』ことは、特に小学校の場合は効果をあげていると言える。中学校の場合は特別の時間を作ることの難しさがあり、まだ、効果を感じるまでには至っていない。

社会的スキル尺度の集計結果はまだ出ていないので、狙った効果がどの程度みられたのか未定である。

次年度は、小学5年生と中学2年生を対象に実施する予定。

6. 研究発表

学会発表

2018年11月に開催される第23回SST学術集会 in 札幌で発表予定。